

2026.02.22.

## 「祝福の源」

旧約 創世記 12章 1～9節

新約 ガラテヤの信徒への手紙 3章 1～9節

### 1. はじめに

2月の最後の主の日ですので、今朝は旧約から御言葉を受けてまいります。創世記を読み進めてまいりまして、今日は12章、アブラハム物語が始まる場所です。ここから創世記は歴史世界に入っていきます。その歴史は神様の救いの歴史であり、神の民の歴史です。神の民はこのアブラハムから始まりました。アブラハム、その子イサク、更にその子ヤコブ、アブラハム・イサク・ヤコブの三代が神の民の父祖と呼ばれます。ちなみに、ヤコブの別名がイスラエルで、ヤコブの12人の息子達がイスラエルの12部族となっていきます。先ほどから、私はアブラハムと言っていますが、今朝与えられている創世記12章の段階ではアブラムであり、妻はサライです。創世記の17章においてアブラムは神様から「アブラハムと名乗りなさい」（創世記17：5）と告げられてアブラハムとなり、妻のサライもまた神様に「サラと呼びなさい」（創世記17：15）と告げられてサラとなります。アブラムとアブラハム、サライとサラ、どのような意味の変化があるのかは良く分かりません。ただ、どちらも神様からそのように名乗りなさいと言われて変わったということが大切なのでしょう。人類の出発はアダムとエバからですが、神の民の出発はアブラハムとサラからです。アブラハムには、その後現在の私共にまでつながってくる「神の民の原型」が示されていると言って良いでしょう。

### 2. 神の民の誕生① 召命によって

アブラハムは、神様によって召し出され、神様に遣わされた最初の人でした。アブラムは神様によって召し出された時、75才であり、ハランに住んでいました。ハランというのは聖書の後ろにあります地図1「聖書の古代世界」を見ますと、ユーフラテス川の上流の方にある町です。アブラムの父はテラ、テラがアブラムを産んだのはウルという町でした。古代メソポタミア文明の一つの中心であったウル、当時もっとも繁栄していた町でした。そこからテラはハランに行き、そこで生涯を閉じました。彼らは遊牧民でしたので、繁栄した町よりも放牧するのに適した土地を求めてハランに来た、或いは羊の草を求めて移動していく中でハランに着いたのかもしれませんが。そのハランでアブラムは神様から「召命」を受けました。「召命」という言葉は、キリスト教ではとても大

切な言葉ですが、教会以外では用いられることのないキリスト教用語です。英語では **calling** と言います。神様によって呼び出され、為すべき事や使命が与えられることです。アブラムは神様から召命を受け、その召命に従って歩み出しました。ここから、神の民の歴史が始まりました。

アブラムがどのような人であったのか、聖書は何も告げません。そんなことには一切触れず、いきなり「**12:1 主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。』**」と告げました。そして4節「**12:4 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。**」と聖書は告げます。アブラムには家族も居ました、親類もいた。神様がアブラムを導いたのはカナン地でした。ハランから 500 kmは離れています。交通手段はただ歩くだけです。もっとも彼らは遊牧民でしたから、日常的に羊などの家畜を連れて移動していました。宮崎市から延岡、北九州を通って広島市くらいまでの距離です。アブラムはハランにいても生活は出来ていました。聖書は、「アブラムは大いに悩んだ結果、ハランを出発することにした」とか、「アブラムはサラや甥のロトと相談した結果、ハランを出発することにした」とは記していません。それは、アブラムが相談しようまいと、悩もうと悩ままいと、神様の召し出し、神様の召命というものは圧倒的な権威と力を持っており、それに抗（あらが）うことは出来なかったということでしょうか。多分、彼にも不安はあったでしょう。しかし、その不安を神様に委ねて一步を踏み出していく。それが召命に応えるということなのでしょう。

### 3. 召命に従う、年齢、

私は栃木県に生まれ、18才で東京に行き、予備校・大学に行きました。この時に教会に通うようになりました。それから一般企業に勤めまして、27才で会社を辞めて神学校に行きました。卒業する時に富士美さんと結婚し、京都府の東舞鶴教会に赴任し、そこで17年、それから富山鹿島町教会で21年、そしてこの宮崎中部教会に昨年まいりました。初めて東舞鶴教会に赴任する時は不安でした。初めての土地で、知っている人も一人もおらず、幼稚園もありましたし、結婚したばかりだし、毎週説教するのも初めて、何もかもが初めてでした。しかし、神様が遣わされるのだから、きっと何とかしてくださると自分に言い聞かせていました。富山鹿島町教会に転任する時にも、やはり不安はありました。行ったことのない土地ですし、雪深いとも聞いていましたし、逆に幼稚園がありませんでした。しかし、何とかなりました。しかし、昨年宮崎中部教会に遣わされた時には、全く不安はありませんでした。38年の牧師としての歩みから、主が全てを備えてくださることがはっきり分かったからです。

神様は自由なお方ですから、自由に私共を召し出し、召命を与えられます。伝道者・牧師にとっ

て、もっとも重大なことがこの「召命を受けた」という事実です。これが曖昧ですと、牧師として立ち続けていくことは出来ません。神学校での日々も、教師検定試験も、結局の所はこの召命を確認するための手続きです。しかし、召命はどのようにして確認されるのでしょうか。神様は自由なお方ですから、神様の召命を受けた人にはこんな「しるし」がある、と言えるようなものはありません。ですから、本人も、周りの人も勘違いしてしまうことだって起こりえます。しかし、神様は御言葉と出来事をもって、召命が確かに神様のものであることを証しされます。ですから、神様の召命とは「出来事」なのであって、決して「私の気持ち」といったものではありません。

ところで、アブラムが神様の召命を受けて、ハランを出発したのはアブラム75歳の時でした。この年齢を聞いて皆さんは、どう思われるでしょうか。私は若い時、「そんな高齢になって、長い旅なんて出来るはずがない。」と思ひまして、現代とは年齢の数え方が違っていただけではないかと考えておりました。しかし、この時のアブラムの年齢に自分が近付いてくるに従ひまして、これはありがたいこと、素晴らしいことだと思ふようになりました。この時のアブラムの年齢は、神の民の出発においては、年齢なんて関係ない。そう私共に告げているからです。神様に召されたならば、75歳でも、80歳でも、90歳でも、全く関係ありません。何歳になっても、私共は神の民として新しくされます。召命は神様の御業だからです。ですから、恐れることなく、神様に委ねて歩み出せば良い。全ては神様が備えてくださいます。

#### 4. 神の民の誕生② 旅する民

さて、アブラムとサライ、それに甥のロトはハランからカナン地方に旅立ちました。この時からアブラムはこの地上での生涯を閉じるまで、ずっと旅を続けます。この時以来、神の民は「旅する民」なのです。神の民の父祖達は遊牧民でしたから、旅することが人生そのものでした。しかし、神の民が旅する民であるということは、遊牧民のように生きるという意味ではありません。この旅というのは、ただ地球上のある地点からある地点へと旅をするということだけを意味している訳ではありません。神の民が「旅する民」であるというのは、何よりも「御国に向かって旅を続ける民」であるという意味です。時間の旅人と言っても良いでしょう。生まれた時からずっと同じ土地で生活していても、神の民であるキリスト者は、御国に向かって旅を続けているわけです。

現代の旅行は、とても安全で快適です。これを「旅」と言っても良いのかどうかためらうほどです。聖書の中に記されている旅は、旧約においても、新約においても、危険と隣り合わせでした。山賊もいれば海賊もいます。狼だっています。宿屋だってちゃんとあるわけではありません。それでも、神の民は旅を続けました。それは、神の民が旅をするのは、単に自分の救いのためだけではなく、神様と共なる旅をし続けることによって、「神様の力」「神様の愛」「神様の真

実」といったものが、自分と出会った人達に伝えられ、神様の救いの恵みが更に豊かに宣べ伝えられていく。そのために、神の民は旅を続けたのです。イエス様ご自身がそうでしたし、使徒パウロやペトロなどもそうでした。このことは、後でまた触れます。

### 5. 神の民の誕生③ 神の約束と共に

この時、神様はアブラムに対して「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。」とおおじになったではありませんでした。神様はこのように約束をも与えてくださいました。「12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める」これは、アブラムを祝福し、その子孫を大いに増し増やし、大いなる国民にする、そしてアブラムの名を高めるという約束でした。アブラムにはずっと子どもがおりませんでした。ですから、この神様の約束はアブラムとサライにとって、最も欲しい神様からの恵みの約束であったに違いありません。神様からの召命に従って旅立ったアブラムでしたが、それはこの神様の約束の真実を証する歩みでもありました。神様の「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。」とのお命令に従って旅を始めたアブラムでしたが、その旅において何が待っているのか、アブラムは知りません。しかし、その歩みの中で「12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める」との約束が果たされることを信じて、旅を始めました。しかし、アブラムとサラとの間に我が子イサクが与えられるのは、その25年後、アブラムが100才、サラが90歳の時でした。その間、彼らはずっとこの約束を信じ続けることが出来たわけではありません。途中で、こんな年老いた者に子が与えられるはずがないと思い、子が与えられることを諦めてしまうこともありました。しかし、神様はご自身が約束されたことを忘れることなく、実現してくださいました。それは神様の奇跡としかいいようのない出来事でした。実に、神の民とはその始めの時から、神様の奇跡と共にありました。

アブラムがいつ頃の時代の人なのか、はっきりしたことは分かりません。しかし、おおよそ紀元前1800年頃ではないかと考えられています。今から3800年ほど前ということになります。その間、ずっと神の民は神様の約束と共にありました。神様の約束を信じ、神様と共にこの世の旅を続けてきました。そして、今も続けています。

### 6. 神の民の誕生④ 危機の中で

ところで、なぜアブラムとサラが選ばれたのでしょうか？それは私共が選ばれた理由が分からないのと同じように、その本当の理由は神様にしか分かりません。でも、確かに言えることが一つあります。それは、アブラムとサライが既に高齢となっていて、子どもが産める状態ではなかったと

ということです。サライはアブラムより10才年下ですから、この時の年齢は65才です。11章30節にははっきりと「サライは不妊の女で、子どもが出来なかった」と記されています。ですから、もしアブラムとサライの間に子が与えられるとすれば、それは「神様の御業」「神の奇跡」となります。神様が生きて働いておられることの証しとなります。だから、アブラムとサライが選ばれたのだと私は考えています。彼らに子が与えられていなかったことは、アブラムとサライにとっては、まことに辛いことであり、神様から自分たちは見捨てられていると思っていたかもしれません。しかし、神様はそのことの故に彼らを選ばれた。神様が共におられることを証しする民として、「神の民」として立たせるためです。彼らが若くて元気だったならば、彼らに子が与えられたとしても、それは自然なことで、神様の奇跡によってとは誰も思わなかったでしょうし、自分たちも思わなかったでしょう。それでは「ただ神様の御業によって生きる神の民」とはなりません。神様の栄光は、私共が「出来ると考えている所」や「自分に能力があると思っている所」に現れるのではなくて、自分が「負い目とと思っているところ」、「苦手な所」「人に隠したいような所」、そこにこそ現れるのです。それが神様のなさり方なのです。

## 7. 神の民の誕生⑤ 祝福の源として

さて、アブラムに与えられた約束はもう一つありました。それはアブラムが「祝福の源となる。12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」ということでした。アブラム達の子孫が増し加えられ、大きな民となるということは、アブラム一族に対しての祝福です。しかし、神様の祝福はそこでは終わりません。そもそも、神様がアブラムを選び、そこからイサク・ヤコブとつながり「神の民」を生み出していたのは、「地上の全ての氏族を祝福するため」でした。これが決定的に大切なことです。神様はアブラハム・イサク・ヤコブ、そしてイスラエルの民といった具合に神の民を成長させていかれたわけですが、この神の民は「神様が全ての民を祝福する」という神様の救いのご計画のために用いられるために造られたということです。「祝福の源となる」とはそういう意味です。「祝福の源」のイメージは、ここから神様の祝福が湧き出で、周りに溢れていき、周りの民が、全ての民が神様の祝福に与っていくということです。

イスラエルの民は、アブラハムを父祖とする神の民であることを誇りとし、自分たちは特別な民であって神様の祝福を受けるが、他の民は神様の裁きを受ける汚れた民だと見なしました。このような意識を「ユダヤの選民意識」と言いますが、これは神様のみ心を全くはき違えたものでした。イスラエルは確かに神の民でしたけれど、それは全ての民を神様の祝福に招く使命を持つ民であるということであって、自分たちだけが神様の祝福を受けるなどということは全くの誤解でした。

それ故、神様は御子イエス様を送り、全ての民の罪の裁きを担わせ、十字架におかけになりました。そして、そのイエス様を信じる者は、世界中のどの民であっても救われる、神の子としていただき、永遠の命に与ることが出来る道を開いてくださいました。そして、その全ての民を神様の救いへと招くために新しい神の民として、キリストの教会が建てられたのです。キリストの教会は、アブラハムの祝福を受け継ぐ新しい神の民として建てられました。

先お読みしましたガラテヤの信徒への手紙 3 : 6 ~ 9 で「 3:6 『アブラハムは神を信じた。それは彼の義と認められた』とされているとおりです。 3:7 だから、信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。 3:8 聖書は、神が異邦人を信仰によって義となさることを見越して、「あなたのゆえに異邦人は皆祝福される」という福音をアブラハムに予告しました。 3:9 それで、信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムと共に祝福されています。」と告げられている通りです。アブラハムは自分に子どもが与えられることを信じられなくなってしまった時、「神様はアブラハムに空の星を見上げさせて『あなたの子孫はこのようになる。』と告げ、アブラハムは主を信じました。主はそれを彼の義と認め」（創世記 15:5,6）しました。こうして、アブラハムは、「信仰によって義とされる」という神様の救いに与りました。私共はこのアブラハムの子孫であり、「ただ信仰によって救われる」というイエス様の福音を宣べ伝えて、全ての人を神様の祝福に与るようと招きます。そうして、私共は祝福の源として神様の御心を全うしていくことになります。これが私共に神様から与えられている使命です。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、アブラハムの召命の出来事を通して、神の民としての有り様を示してくださいました。ありがとうございます。どうか私どもが、神の民として、祝福の源として、あなた様が私共に与えられた使命、「信仰によって救われる」という福音を、この地に住む人々にしっかり宣べ伝えていくことが出来ますように、私共を強め、励ましてください。私どもが信仰の眼差しをしっかりと御国に向けて、あなた様が全てを備え導いてくださることを信頼して、健やかに信仰の歩みを為していくことが出来ますようお支えください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン